

## 小学校におけるハンドボールの教材化に関する研究

佐藤正規 (小学校課程・保健体育副専攻)

### 〈序論〉動機・目的・方法・先行研究

ハンドボールを教材として、小学校の体育における「ボール運動」や「ゲーム」の目標とすることを児童に習得させたいと思ったのが、この研究をしようと思った動機であった。そこで、ハンドボールは小学校の体育の教材としてどのような価値と意義をもっているのかを考察する。この研究で得られた結論が、将来私が小学校の教師となりハンドボールの授業を行うときの、基礎理念となることを目的とする。

ハンドボールを小学校の体育の教材として扱う場合の問題点や課題を見つけるため、今までになされた研究を大きく3つに分類して検討した。その結果、次の2つの課題が浮かび上がった。①学校体育における球技の意義や球技のなかのハンドボールの特性について詳しく述べられていないこと、②子どもの“運動発達”にあわせたハンドボールの教材化の研究がなされていないことである。これらの結果をもとに、本研究は、小学生の運動発達についてMeinel, K.の運動発達論 (Meinel, K. 1988) を基に考察した上で、球技の特性とハンドボールの特性を明確化して、小学校におけるハンドボールの教材化について検討する。

### 〈本論〉第一章 教材 (教材化) とは何か

教材とは、「目標の内容を子どもに学習させていくときの媒介物である。これを媒介に使うことによって、学習目標をそれなしには達することのできない深さまで、より多くの子どもに、より楽しく習得させるべく特別に加工された文化財が教材」(註, 1974)である。そして、学習内容をクラス全員に習得させるために、「素材」を子どもの興味・能力にあわせて修正したり構成を図ったりすることが教材化である。

#### 第二章 小学生の運動発達

小学校低学年の子どもの運動系の発達状態の主な特徴は、活発性が前面に浮き彫りになることである。運動の基本形態は十分な達成を果たす能力があるが、活発性との関連から目標指向的な運動は比較的ゆっくりと行われる。しかし、就学前の子どもであっても相応の教育学的指導があれば、運動課題を目的にしたがって把握し、実現していくことが可能である。

9~11, 12歳の時期は、身体の発達や高次神経活動の発達が有利な条件となり、運動系の発達の最高潮を示す。“即座の習得”や“時機を得た専門化”の前提となるものは基礎的スポーツ種目を多面的に経験し、訓練することである。全面的な運動系の発達は、この年齢層の主要なる課題である。子どもたちは運動を全体として把握し、遂行するので、運動財を知らせるときには示範に意義が寄せられる。

#### 第三章 ハンドボールの特性論

ここでは、ハンドボールの特性について述べるわけだが、その特性をより際立たせるため、初めに球技についてまとめた。

球技は、他のスポーツ種目よりもずっと複雑な性質の能力要因からできあがっている。コンディショニング、協調能力、精神的能力などいくつかの能力と独自のパーソナリティ

とが同時的に要求され、発揮される。この特別な能力や技能が組み合わさると、そのゲーム特有の質をそなえた行為が生まれるのである。また、技術と戦術との密接な関係も球技の特徴である。戦術がうまく発揮されるかどうかは、正確な予見 (先取り) ができるかどうかにかかっている。

球技の分類(註, 1991)は、各種のゲーム形態を比較してその価値を考察するために重要である。ここでは、各競技種目群について、グループやチームの運動経過と個人の運動経過とにわけてその特性を考察した。ハンドボールは敵陣突破型で身体接触を伴う種目群に属す。この種目群は、走る、蹴る、跳ぶ、投げる、捕るなどの運動の基本形態が複雑に組み合わさって、状況に対応した動作が現れるのが特徴的である。フェイントもこの種目群にみられる特徴である。しかも、身体接触が伴うため、力強い戦術的=技術的な徴表がみられる。両チームの攻防の運動形態は、常に相手に応じて可変的である。

ハンドボールの特性を考察するため、ハンドボールの形態的特性、ゲームの特性、技術・戦術的特性、教育的特性をまとめた。ハンドボールは、敵陣突破型の身体接触を伴ったチームゲームであり、ゲームにおいて多面的な身体能力を要求される。ゲームの勝敗は戦術の効力に直接的に関係するため先取り能力が重要となる。教育的特性としては、全身の運動を保障するものであること、空間やタイミングの認識の形成が可能であること、ボール操作が簡単で作戦が立てやすいことなどが挙げられる。

### 〈結論〉

本研究は、ハンドボールが小学校の体育の教材として適しているかどうかを明らかにするために行ったものである。ハンドボールは、運動の基礎形態をすべて含んでいるスポーツであり、それらを基礎とした技術が戦術と密接に関わっていることが特徴的である。ゲームを通じて多面的な身体能力と、状況判断する能力が培われる。戦術は、ボール操作が容易なため立てやすく、実行しやすい。戦術的な考え方を育てるのに有効である。また、ルールも簡単で覚えやすいし、柔軟性があるため工夫しやすい。これらのことから、ハンドボールは活発性の強い小学校低学年の子どもや、運動系の発達が最高潮の時期の子どもに対しても有効な教材の「素材」となり得ると考えられる。

本研究の今後の課題は、「素材」としてのハンドボールを、子どもの運動発達や身体的発達、高次神経系の発達などの段階を考慮して、より有効な「教材」になるように工夫し、実践することである。

#### —主要参考文献—

林 恒明, 体育科典型教材づくり, 日本書籍, 1992

Meinel, K. (金子明友訳, 1988), マイネル・スポーツ運動学, 大修館書店

佐藤靖, 球技の指導, 中森 郎他著, 小学校・中学校体育教育, 中央法規出版, 1991

G: シューテラー他著 (唐木國彦監訳, 1993), ボールゲーム指導事典, 大修館書店